

津軽の田面から消えたもの（４）

番太郎 昔の水稲反収は低かった。化学肥料もなく堆肥に頼っていた頃は、堰（用排水路）の上げ土（泥）を畦畔で乾したのも貴重な肥料の一種であった。

反収（十アール）も五〜六俵ぐらいで、稲の乾燥方法も島立による自然乾燥であった。

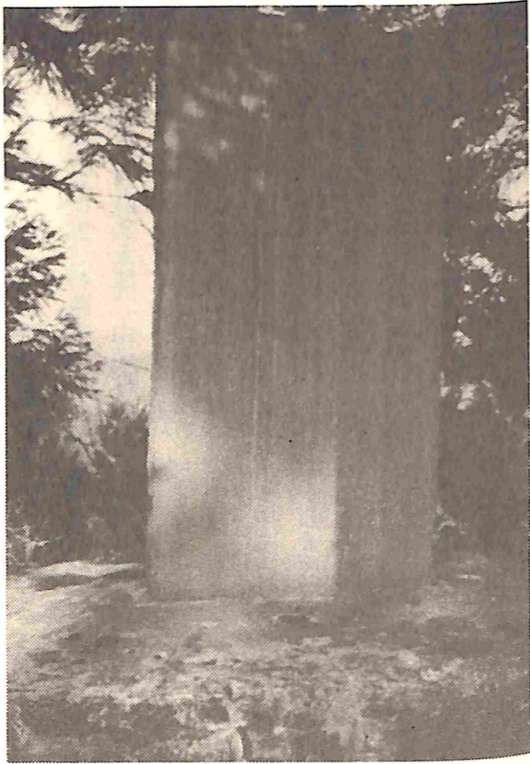
秋になって黄金の波が、何時の間にか行儀よく島立の行列に変わって、稲乳穂を積むまでにいい風が吹いて早く乾燥されればよいと願っていた。

ある時、島立の盗難騒ぎが発生した。

百姓たちは、一年の汗の結晶を広い田圃に互いに信頼し合って置き放しにしていたのだが、盗難も二回、三回と続くと信頼関係が崩れ、お互いが疑いの目を向け合うようになる。

村の重立（有力者）が相談し、秋の収穫期だけ巡視員（番太郎）を置くことになった。

番太郎は、毎年二人選ばれる。稲刈りがはじまる頃から稲上げが終るまで約二カ月間（十月から十一月まで）。まず、番太郎に選ばれた人は、古町の西はずれの小田川の端に堀立の番小屋を建てる。番小屋の中には虫祭りに使う大太鼓を置く。稲刈りがはじまれば午前四時、まだ暗いうちに家を出て番小屋に詰める。



▽組合長 木立民五郎▽副組合長 鳴海金四郎▽理事 松川専五郎、伊藤清慈、山中清市、成田善蔵、鎌田清、吉崎忠直、吉崎春雄、鳴海彦一▽事務局長 小山西昭人▽事務局長 小倉秀高▽組合員 伊藤良雄、松川松エ門、伊藤武義、棟方とみ多、伊藤洋吉、松川兼次郎、秋元武盛、伊藤重次郎、松川忠勝、伊藤徳衛、伊藤与四郎、伊藤満平、鎌田由正、泉谷嘉四郎、花田永助、沢田松四郎、鎌田孫右エ門、山中敏正、小松丑太郎、伊藤寅次郎、松川義一、伊藤定五郎、原田吉雄、神島忠雄、秋元勇雄、小山西政太郎、木立忠政、秋元金五郎、高橋喜一、小山西直八、木下石雄、秋元清五郎、鳴海与八、鈴木松太郎、白川善五郎、中村弥慶八、鎌田直志、今兼春、山中由、須崎梅太郎、斉藤亀男、山中文蔵、伊藤正美、棟方義雄、伊藤豊太郎、鎌田富蔵、白川春右衛門、秋元憲一、松川平次郎、松川英造、山中竹春、秋元定夫、鎌田寅太郎、小松竹三郎、

午前五時『田圃に出てもよい』との合図の太鼓を打ち鳴らす。日中は、どこの地区がどれだけ稲刈りが進んでいるかを見て回る。午後三時には、『島立を立てる時間だよ』と知らせる太鼓を打つ。午後五時には上り（作業終了）の太鼓が鳴り響く。秋の日は短く、十月も下旬になれば、上りの太鼓も三十分早くなり四時半となる。番太郎は、上りの太鼓を打ってから十五分ほど余裕をみて田面の門を閉じる。（実際は扉があるわけではなく、時間をもって通行を止めること。）

番太郎の役目はこれからが本番である。門を閉じて一服してから、嘉瀬地区の水田全部を巡視するのである。時には午後十時までかかる事もある。

番太郎は重要な役目である。その報酬は、耕作反別割で農家が負担する。一反歩当り三合の米を集めて二人の番太郎に支給される。

番太郎は、戦後になってからは、常会長の寄り合いでの推選で選任された。

昭和三十年代後半になると大農機具の発達により、稲刈り期間も短りなり、バインダー、コンバインと変わってくるようになり、時を知らせる番太郎太鼓も必要でなくなり、何時しか番太郎が津軽の田面から消えてしまった。



植林記念碑

嘉瀬部分林組合

昭和三十七年九月十日

伊藤甚四郎、松川秀光、松川友太郎、秋元文四郎、松川新八、斉藤伝作、松川利雄、松川光雄、伊藤武雄、須崎安政、伊藤勉、伊藤征敏、伊藤征雄、棟方午之助、山中兼光、松川清造、棟方盛衛、花田征八、泉谷道則、栗野竹虎、花田三太郎、櫛引チャ、吉崎正光、舛甚万次郎、斉藤繁則、内海勘之作、伊丸岡兼保、山中哲男、櫛引征衛、浜田常五郎、木立久一、櫛引藤之助、今司真雄、吉崎義光、鎌田武智、鳴海民之助、木下熊男、鳴海アヒ、岩村繁義、小山西治三郎、野呂喜代武、原田堅蔵、吉崎由光、浜田勝衛、中野正明、工藤多一郎、中村長作、松江伊三郎、鎌田善七、沢田国春、秋村米作、鳴海芳雄、鳴海久男、今征与四、山中誠次、今豊五郎、角田千代吉、山中武太郎、須崎多一、沢田兼八、浜田誠治、山中文長。（以上表面）

浜田重一、山中文雄、沢田竹次郎、小松照男、鳴海善太郎、櫛引米次

郎、飯塚佐一郎、山中利助、山中利蔵、土岐繁美、山中徳一、沢田兼七、
 鳴海一郎、津田貢、今嘉七、山中稔、神島弥之助、山中春一、山中賢治、
 沢田幸八郎、山中長三郎、山中操、今金治、米塚利吉、今賢樹、鳴海勝
 雄、土岐安丑郎、須崎正敏、須崎正志、斉藤繁雄、鳴海勝義、鳴海光義、
 神島哲雄、土岐善五郎、秋元誠逸、内海徳一、山中徳准、鳴海権四郎、
 斉藤義雄、沢田忠勝、山中源太郎、小山内繁男、山中与七、山中伊太郎、
 鳴海久弥、平川久次郎、土岐岩五郎、須崎悠悦、小山内男治、山中秀雄、
 沢田由男、古川平内、今反次郎、秋村粕太郎、山中辰三郎、山中満衛、
 小松久太郎、棟方チエ、山中金吾、黒川勇吉、鳴海武雄、須崎金成、鳴
 海シナ、山中耕一、舛甚二俊、小松平内、木下無市、斉藤亀七、原田新
 八郎、鳴海大次郎、中村正一、今喜代友、鳴海勲、鳴海峰四郎、阿部清
 光、花田粕五郎、木立忠、斉藤岩次郎、鳴海為之助、木立照塔、平川由
 八、鳴海忠吉、田中茂義、吉崎長一郎、山中治、津田孫市、斉藤勝衛、
 木下勝三郎、木下市太郎、吉崎丸市、木村治一郎、山中岩一、小松久次
 郎、山中定吉、鎌田吉太郎、外崎好栄、鳴海亀太郎、秋元幸之進、平川
 久衛門、木下綱雄、鳴海武太郎、山中松茂、小山内兼蔵、鎌田稲辰、山
 中寛造、斉藤六雄、鳴海貞雄、秋元万四郎、吉崎男治、木下正義、大西
 作次郎、津田与八、吉崎喜代志、舛甚頼壯、山中清、平井清、木下直七、
 原田金四郎、沢田繁男、沢田繁市、須崎武男、須崎健二、神多作、沢田
 金雄、沢田万次郎、小松常丑郎、神島専造、山中政太郎、秋元直市、山
 中正津、吉崎長三郎、山中林一、須崎為造、原田稔、黒川兼光、秋元卯
 之助、鳴海正夫、秋元惣之進、山中富士男、山中助広 二七四名(以上裏面)
 (注) 1. 小山内昭人は小山内繁四郎、2. 小山内政太郎は小山内正太
 郎、3. 吉崎義光は吉崎好光、4. 秋元誠逸は秋元清逸、5. 小松久次

郎は小松久治郎。

わが国の面積の六八％は森林であつて、そのうち国有林は三二％も占
 めているといふ。
 金木町の総面積百二十六・四七平方料(東西十五・五料、南北十二・
 三料)の広さのうち約五七％は国有林である。
 町の地形からみて、東方に梵珠山脈(中山山脈ともいふ)が走り、そ
 のほとんどが国有林である。
 森林は農業、特に水稲栽培に欠かすことのできない水資源でもある。
 戦後乱伐した国有林を緑にかえそうといふことから、国の林業行政と
 して分収造林事業を強く推進し、金木町においても昭和三十三年から三
 十四年にかけて五つの部分林組合が設立され、営林署と町と、又は営林
 署と部分林組合との間に部分林の設定が行われた。
 (注) 分収造林とは、土地提供者、投資者、造林者の二者もしくは
 三者が伐採収益を一定の比率で分割することを前提に行われる植
 林である。

嘉瀬部分林組合は、昭和三十四年一月十三日に設立し、青森営林局と
 金木町とが契約した部分林四九・一三ヘクタールの造成委託契約をした。
 伐採収益の分収率は、国二、町八で、町と組合は、町三、部分林組合
 七の割合となる。

部分林組合設立届

昭和三十四年一月十三日嘉瀬部落に於て森林資源造成の目的
 を以て嘉瀬部分林組合を組織しました。

依而御町と青森営林局と契約に係る部分林を当組合と部分
 林造成委託契約締結下さるよう、別紙名簿及び規約等添付し
 御届け致します。
 昭和三十四年三月十六日
 北津軽郡金木町大字嘉瀬
 嘉瀬部分林組合
 組合長 木立 民五郎 ㊟

右の通り国と金木町と契約した部分林については町条例に依
 り嘉瀬部分林組合は左の条件を承諾し、双方署名捺印の上、各
 一通を領収しておくものとする。
 昭和三十六年一月七日
 北津軽郡金木町長 津島 英治
 金木町嘉瀬部分林
 組合長 木立 民五郎

部分林造成契約書
 造林箇所 青森県北津軽郡金木町大字嘉瀬字嘉瀬山国有林七
 林班に、ほ、と小班全

一、嘉瀬部分林組合はこの部分林について造林の行為を行うこと。
 二 国と町との契約条件について嘉瀬部分林組合は町に代りこ
 れを履行し、国に対して町と嘉瀬部分林組合が連帯責任を負
 うものとする。
 三、町と嘉瀬部分林組合の収益分収は、町三、部分林組合 七
 とする。
 四、苗木代、造林費その他手入、維持管理等一切の費用は部分
 林組合の負担とする。但し、以上に対する国、県等の補助金
 は部分林組合の収入とする。
 五、当事者の一方がこの契約に違反した時は契約を解除するこ
 とができる。

台帳面積 二五一、五一〇一ヘクタール
 実測面積 四九、一三ヘクタール
 一、植栽木の種類、数量及び植栽の時期
 赤松 一一二、〇〇〇本 昭和三十五年植栽
 杉 七三、九五五本 昭和三十六年植栽

この場合違反者に契約解除によって生じた損害賠償を請求す
 ることができる。

二、分収歩合 町 三 造林者 七
 三、存続期間 自 昭和三十五年 五十五年
 至 昭和八十九年
 四、伐期 自 昭和八十六年 赤松 二回
 至 昭和八十九年 杉 二回

六、嘉瀬部分林組合は、その目的を達成する為運営規則を作成
 し町に届けると共に毎年一回保護管理その他の所要事項につ
 いて報告すること、但し重要事項についてはその都度報告す
 ること。
 七、部分林に関する法の改正があつた場合は双方協議の上、取

決めること。

昭和三十五年から三十六年にかけて、嘉瀬山の部分林に指定された土地の雑かん木を切り開き、数班（各町内毎）に分れて地ごしらいをし、赤松や杉の植林を行なった。

三七三名の組合員も、それから数年間の補植や下刈り作に出役しなければならず、収穫（伐採）は五十五年後という気の遠くなるような長い年月を要する事に、自分の代には収入につながらない事を当初から理解した筈なのに、^な度重なる労力投資に飽き^おき^きがきて脱落する人が目立ちはじめた。

素通りした嘉小百十周年

小山内 嘉一郎

昭和六十二年二月十日は、嘉瀬小学校の創立百十周年の記念日であった。学校当局もPTAも、それについて検討したり集会などをもたなかったのではないか。結局百十周年記念行事は何ひとつもないまま、素通りしたのではないだろうか。

従来はこの種の行事は、先づPTAが音頭をとって一般学区民に呼びかけるのがパターンになっていた。私がPTAに関係していた昭和三十二年二月、創立八十周年記念事業を始めての試みとして行った。勿論地域住民一体となって事業協賛会を結成してのことであった。九十周年事業（四十二年二月）も同様に展開したものである。

めた。

植林してから十五年間位は保育期間で、二十年を過ぎ間伐期に入ったが、保育期間での手入れが不十分で間伐できるまでに成育しませんでした。昭和五十五年金木営林署からの強い警告と指導で、町の助成のもとに林道の整備と雑木やかん木の伐採、成育した杉の枝打ちなど再び手入れをはじめた。

しかし、財を子孫に残すこの事業には、当主の死亡や高齢化によって、三分の一の組合員が脱落した。

— 取材・山中正津 —

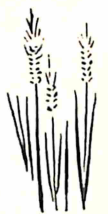
ところが九十周年と百周年の丁度中間に当たる、四十八年秋に新校舎落成記念事業もあったので、実質五年刻みの記念事業となり、学区民も関係者もいささか疲れたようにも思われた。この間に南中学校新築落成もあるなどで、寄付金つかれに拍車がかかったようだ。また普段は殆ど動きもなく、その存在さえ忘れられている嘉小同窓会の木立民五郎会長からも百十周年について、お話があり早速数人の有志に話したが、余り色よい答えもなく無為無策に過して今日に至った。

思えば嘉瀬小学校（尋常科）より母校にもたない私など、もっと報恩の行動をしなければと思うのだが、いざという時には消極的で多くの皆さんに迷惑をかけることが多いのだ。

百十周年記念事業も、今となっては後悔しているのだが。遅ればせながらせめて有志だけでも、校庭に記念樹を植えるなり、できないこともないだろう、百一周年だって百十二周年だって構わない。私たちがふるさとを探る会だって、嘉小百年史の落し子であるから。

木造新田散歩

木村 治利



昭和六十二年九月二十日稲刈を直前にして、歴史散歩に出ることになった。今回は木造新田地帯を中心に、寺・神社・観音堂等の未踏査の場所を選んだ。参加者は外崎三千男、小山内嘉一郎、山中正津、須崎正敏、秋元惣之進、原田万治、木下清一、木立久二、秋元清逸、木村治利の十名である。

津軽三新田は、柏村を中心とする広須新田、金木新田、木造新田のことで、今から約三百年前四代藩主信政の時代に本格的な新田開拓が行われた。

寛文年間（一六六一〜七二）より元禄年間（一六八八〜一七〇三）に亘り、積極的新田開発で津軽藩の生産高は、寛文四年（一六六四）の藩の実収高十五万石が、元禄七年（一六九四）には約二十九万石となり、三十年間で収穫は倍増するというめざましい成果を得た。

しかし、その背景には難工事に使役された農民の労苦である。血と汗の歴史であつたらう。

広須新田、木造新田を巡りながら、弥三郎節を口ずさみ、一望千里に拡がる田園風景に感謝し、秀峰岩木山を眺望しながら先人の歩いた道を散歩しようと思う。

〇一本タモ

野田の県道、岩木川堤防の傍にタモの大木があった。樹齢四百年のヤチダモで、稲垣村の歴史を物語る「一本タモ」と呼ばれている。

今から約三百年前（津軽四代藩主信政公時代）、津軽北野の当地方にはじめて開拓の手が入った頃、すでに樹齢百年余に及ぶと思われるヤチダモが荒野の中に毅然として聳えたと伝えられる。

ヤチダモの幹のこぶは、女の乳房に似ていることから大石神社が祀られ乳の神として信仰され、乳のでない婦人が信仰すれば、乳が出るといわれる。

幹のまわり一丈八尺余（約5.5m）高さ十二間（約22m）といわれ一本で森を作っていたものだが、最近道路の舗装や車の往来のため、めっきり樹勢が衰え、大枝が折れたり危険のため枝がはらわれたりして、太い幹だけが目立っている。



乳の神様一本タモ（野田）

〇久米川遺跡

午前八時半稲垣村役場前に到着、久米川遺跡を尋ねたが知る人もなく役場に立寄ったが日曜日のため職員も不在、役場前の雑貨店に入り管理者の名を告げたら親切に各所に電話してくれ恐縮至極。家は判明したが

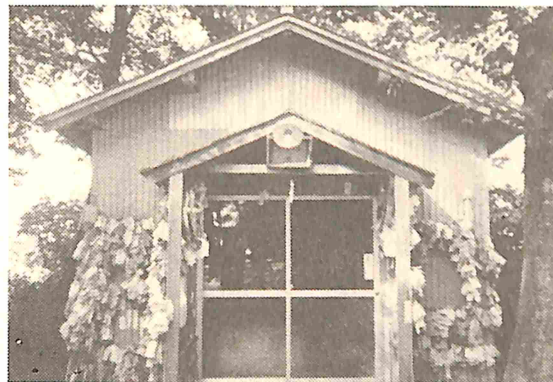
本人は不在で、場所など不明とのことであった。無通告で来訪する私たちの非を悟り、車で田圃の中を捜し廻ったが、みづから結局断念、次の散歩地へと向う。

○月夜見神社・十二番蓮川観音堂

吉出村に入り、尚農道を真直ぐ西に進むと蓮川に入る。一望千里の水田の中に、ぼつんぼつんと島のように村があった。蓮川は南北に細長い村で左手の出精川沿に南に進むと、川向うに大銀杏に囲まれた月夜見神社があった。境内には三十三観音堂の石像があり、二間四面の御堂に、ご本尊の聖観世音が奉安されていた。



月夜見神社 (蓮川)



月夜見神社の境内にある33観音の12番蓮川観音堂

縁起によれば、天和二年(一六八二)村人によって創建され、正徳三

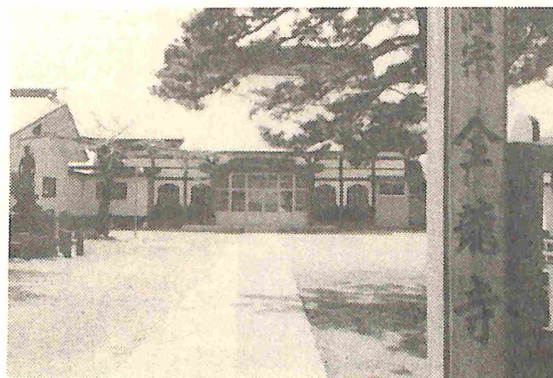
年(一七一二)に正徳院とともに再建された。それが明治初期、神仏分離で御堂は解体され、ご本尊は上納、そして月夜見神社となった。明治四十二年観音堂を建立し、村内にあったご本尊を奉安し、十二番目の霊場に復活した。昭和五年には御堂を再建し、慈霊園とも称した。県内は勿論、北海道や秋田県よりの巡拝者も見受けられ内札が幾百枚も垂れ下り、一〜二回目は白紙、三回目は板札、四回目は黄紙、五回目は青紙、六回目は赤紙、七〜九回目は銀紙、十回目は金紙(安産、守札)となっている。金紙も数枚見受けられた。

○瑞光山 全龍寺(曹洞宗)

太宰治の「津軽」の中に「ここから(木造)見た津軽富士も、金木から見た姿と少しも違わず、華奢で頗る美人である。このように山容が美しく見えるところからは、お米と美人が産出するといふ伝説があるとか。」

私たちは、美しい岩木山を眺め川添いに三百米程進む。右手に津軽藩士小山内作衛門が独力で建立したという全龍寺が端然と構えていた。

蓮川村が開村になった翌年の貞享三年(一六八六)、越後からきた宗鉄(号は随応)が弘前の長勝



瑞光山全龍寺(曹洞宗)(蓮川)

寺十六世船隻徒泊大和尚に依頼して開山、小山内作衛門がほとんど独力で建立したという。

建立以来これまで三回火災に遭っている。文政七年(一八二四)、慶応二年(一八六六)、明治二十六年の三回で、什物など焼失してしまっ

た。現在の庫裡は明治二十六年、本堂は三十三年に完成した。薬師堂は昭和三十年に完成した。これを記念して蓮川村出身の彫刻家、中野桂樹氏に依頼していた等身大の薬師如来像ができ上がった。ガンダラ文化の手法を取り入れたというエキゾチックな仏像である。

仏像の前に「瑠璃光」の掲額がある。文字は永平寺の熊沢泰禅貫首が書き、中野氏がノミをふるったもので、宝物の一つになっている。

寺宝として大般若経六百巻もある。昭和六年に三百年祭が行なわれた。全龍寺を出ると美しい松並木がある。元禄年間に赤穂義士の快挙になぞらって四十七本の松を植えたという松並木の一部である。

戦時中、松根油採集のため伐採され、その一部が名残をとどめているにすぎない。

蓮川をあとに田園風景を見ながら木造へ向かう。太宰治「津軽」の中に「木造みだいに町全部がコモヒに依って貫通せられている」といっているが、今ではとりのぞかれてアーチが設けられている。

コモヒは、歩道の上に軒を一間ほど前に出し、冬の積雪を妨ぎ歩行者の便をはかるためにつくられたものである。木造町を通り抜け、森田村に入る。

○弥三郎節の碑

下相野の高城八幡宮に到着は午前十時である。鳥居のそばに弥三郎節の碑が建立されていた。今では「津軽民謡」や「津軽三味線」は全国的に有名な民謡として唄われている。民謡の大家成田雲竹氏が森田村月見野の生まれだが、「弥三郎節」も同じ森田村の発祥でしかも十一番の観音霊場がある下相野である。

- ㄐ 一つあエー 木造新田の下相野、村の端ンズれコの弥三郎エー
- ㄐ コレモ弥三郎エー(以下略)
- ㄐ 二つあエー ふたり三人と人頼んで 大開の万九郎から嫁もらった
- ㄐ 三つあエー 三つ物揃えて貰った嫁 貰ってみたらどごア気にあわぬ
- ㄐ 四つあエー 夜草朝草かがねども おそく戻れば叱られる
- ㄐ 五つあエー いびられはすがれにらめられ日三度の口つもる



弥三郎節之碑 (下相野)

- 〽六つあえー 無理だ親衆に使われて 十の指コから血コ流す
- 〽七つあえー なんぼ稼いでも働れアでもつける油コもつけさせねエ
- 〽八つあえー 弥三郎ア家コばれ日コ照らね藻川もがの林コさも日コ照るな
- 〽九つあえー ここの親だぢみな鬼だ ここさ来る嫁みな馬鹿だ
- 〽十あえー 隣り知らずの牡丹餅コ 嫁さ食せねで皆かくす
- 〽十一あえー 十一吉日あ蔵びらき 蔵をあげねで嫁いびる
- 〽十二あえー 十二山の神あ餅つきで 嫁も食てアだら門かどまわれ
- 〽十四あえー 湿り打たねで初もつかせ こぼす涙で初アつけた
- 〽十五あえー 縁のないものは是非もない 泣きの涙で暇ひまもらた

津軽地方藩政時代の素朴な生活環境から生れた嫁いびりの悲話である。歌詞の内容が当時の生活状況をよく表わしており、聞く人の共感をさそわずにはおかないのがこの唄の特色である。

〇 高城八幡宮と十一番下相野観音堂

鳥居をくぐると、右手に高城八幡宮がある。由来書によると寛文五年（一六六五）に勧請し下相野観音と称して旧津軽藩三十三観音札掛所として信仰された。

延宝三年（一六七五）盛作右エ門の産土神うぶすまを祀るために自分の家の奥庭（現八幡宮境内）観音堂を創建した。観音像の如意輪観世音は御堂の

奥まったところに、祭神の誉田別命ほんだわけのみこと（応神天皇）高皇産靈神たかみむすひのかみと共に奉安されている。その後元禄三年（一六九〇）村中安全五穀豊穣の守護のため村中で再建した。寛延年中（一七四八〜一七五二）以来津軽三十三霊場第十一番札掛所となり巡礼者も多く参詣した。



高城八幡宮（下相野）

安政二年（一八五五）飛竜宮と改称し、明治四年二月「神仏分離令」によって飛竜宮は廃社になり御堂もとりこわされた。如意輪観音も弘前の最勝院に没収された。しかし実際には身代り観音を渡しておいて本体は秘かにかくしておいたものである。

明治六年八幡宮が創建され、霊場は復活したのである。境内には竜頭観音と称する観音石像がある。昭和三十二年、かつての観音堂跡に昔をしのび奉安したという。

「高城」は、高皇産靈神社の「高」と城構えの「城」をとって名付けたもので、城構えのことは、八幡宮の古い絵図面に境内六六〇㎡あって二重堀の城構え形式とあることによる。

（参考 つがるのお寺さん 津軽三十三ヶ所）

誌上討論ゼミナール



これが嘉瀬の貌だ



秋元 惣之進

嘉瀬は北郡の中央に位置し、東は梵珠山脈（中山）が走り、又、大倉岳（六七七）を斜めに背負っているが、西には広々とした水田が青々と展望され、南は林檎が真赤に色づいている。

気候は比較的温和で、水稲育成期は十五度から二十五〜六度以上であるが岩木山には十月下旬頃から冠雪が見られる。津軽平野の降雪は十一月下旬前後で、根雪は十二月二十日以降であるが三月中旬頃には降雪は終るが比の間、気象条件に支配されて起る自然の厳しい摂理の中にあつて、我々の祖先は困難と寝食を忘れ闘い続けながら生活の根を嘉瀬に「おろし」営々と今日を築いたでしょう。

今日のように自動車が無かった昔の時代は用事があると何処迄も歩か

- ✧ あなたは、嘉瀬をどのように表現しますか。
- ✧ 嘉瀬は、あなたにとってなんですか。
- ✧ 嘉瀬を解剖してみてください。

なければならなかった。

昔は交通が不便だったので僻地（へんびな土地）の人々は、汽車が通って停車場もあり「バス」も走っている嘉瀬は広大な田畑や山野があり秋には茸狩りが出来、又、大きなお宮やお寺が二軒も有り、お盆には他町村からも盆踊を見物に来て踊りが大きな輪となり朝迄 踊り狂っており、火葬場や墓地もあり、役場・学校・郵便局・駐在所・観音山にはスキー場があり、賽ノ川原・神様（ゴミン）・劇場・旅館・飲み屋・ソバ屋・銭湯・製材所・精米所・林檎の製袋工場・製縄工場・ウドン工場・綿打工場・蹄鉄所・造花店・畳屋・豆腐屋・トタン屋・屋根ふき・鞍かき・大工さんなどがあり商店も数拾軒あった。其の外に嘉瀬には色々な商売が昔から沢山あった。

他村の人々は嘉瀬にくると、一応はどんな用事でも足りたものだった。又、地理的にも金木や五所川原に近く汽車や「バス」に乗れるので交通や其の他にも恵まれていた。

嘉瀬の人々は人情や義理にも厚く、又、井戸の水が良いのかお米が良いのか 昔から県内は勿論 県外に出て中央で活躍した人々が沢山おった。

一例を上げると「早大」を出てカリフォルニア大学に学び帰国後「やまと新聞」副社長、又、プロボクシングジム日米拳闘倶楽部創立者の山中利一氏、京都立命館大学卒業、立命館大学講師、花園大学主任教授をし、学術研究で京都府知事の表彰を受けた土岐武治氏、アメリカで柔道の師範をして居る木立智士・宰兄弟、その妹でイラン国で随筆や小説を執筆されて居る木立志雅子、苦学で先生の座を得て中央の寒風にさらされながら綴方教室の教育に走り廻った土岐兼房先生、東京で大活躍をしている湯本正美社長、映画や歌謡界で日本全国に放映され、一世を風靡しておる吉幾三、津軽民謡の草分け黒川桃太郎等が輩出している。

昔の嘉瀬は一寸とした町風的な村であった。
僻地の村から見ると同じ水田地帯でも町風をした嘉瀬には魅力が有り羨望的であった。

これが昔から嘉瀬の人口を増加させた一因でもあると私は信じ、又、嘉瀬の自慢でもあり誇りをもっても良いと思うと同時に、これが嘉瀬の「貌」でもあると思う。

「嘉瀬は良いとこ」

暮しがらくで

嫁にやるなら嘉瀬さこい」

「嘉瀬の井戸の水呑めば」

八十年とそ寄りも 若くなる」



嘉瀬の山河まで様相を変えた。昔は裸山であった嘉瀬山は今密林になつて頼母しい限りである。不整区画の田圃は整理して美田に、川も昔の何倍も広げて直線部分が多く、集落内の道路は舗装となり、住宅も改善されて昔のおもかげが少なくなつてしまった。農作業も四つん這い農業が消えて、機械化農業に発達した。こうした発展の裏では、減反転作で大豆畑に転々と耕地を変えて、政府の転作奨励に更に拍車をかけているのが現状である。

昔あつての今日だから、過去を探るものも当然ですが、前向になつて明日を探る必要に迫られる昨今である。「嘉瀬の貌」異色の『かたりべ』をもつと間口を広げて、発言の場を大きくしたいがどうだろう。

嘉瀬の貌

沢田 薫



「金木は、私の生れた町である。津軽平野のほぼ中央に位し、人口五、六千の、これという特徴もないが、どこやら都会ふうになつてと気取つた町である。善く言えば、水のように淡泊であり、悪く言えば、底の浅い見栄坊の町という事になつていようである。」

以上は太宰治「津軽」の序編の一部である。要するに(旧)金木町は乙にすましている町ともとれる。

隣の我が嘉瀬はどうか、嘉瀬は明日あしたに食う米が無くても、今日祭りがあれば村を挙げてドンチャン騒ぎをする気風があると、何かの本で見たのか、誰かに聞いたのか、私の耳にこびりついている。要するに、ケ

嘉瀬は私のふるさと

小山内 嘉一郎

嘉瀬の貌それは種々の角度から見ることができよう。嘉瀬は私の掛け替えないふるさとである。雲雀野二七六番地は私の本籍地であり現住所である。ここで生れて育ち、今日に至るまでの六十五年、その間戦争中に兵隊に行き外地で暮した二年、身は中国の山奥に在つて片時もふるさとを忘れず、望郷の念が強まるばかりであった。ふるさとから手紙や、新聞などは肌身から離さず、汗で汚れ文字が読めなくなつても、お守りのように下着のポケットなどに入れて歩いた。

私の身心は嘉瀬一色である。嘉瀬に生れたことを幸福に思い、やがて嘉瀬の土になること念願している。母校は嘉瀬小学校だけ、友人、知人も嘉瀬が圧倒的に多く、他町村には数える程度より居ない、いわば井の中の蛙である。経済的には貧しくとも、嘉瀬に住んでいるだけでも満足している。

今は情報化時代、黙つて家に居てもいろいろな情報が新聞、テレビなどで入手できる。それでも嘉瀬の友人、知人ほど私に情報を提供してくれない。ふるさと嘉瀬の貌はどんな貌でも問題ではなく、無条件に何でも良く見える、嘉瀬は私のわがままを許してくれた。時には厳しく叱つてもくれた。勝手気ままに振るまつた私を他村だったら地域外に追放されたと思う。私の両親も義理の親たちも既に亡く、小学校の恩師も大半が他界して、たったお一人だけ健在である。嘉瀬の人々も子供の代になつたり、孫の代になつている家も多くなつた。

セラ セラ、明日あしたは明日あしたの風が吹く、なるようになるさ、の意味らしい。自分も入れて考えてみれば充分にその気がうかがわれる。

昨今、三割減反、米価値下げ等々農業の死活問題の只中にありながら、米どころの嘉瀬では、ケ、セラ、セラ、どうにかなるさの空気である。これは全国の農家にも通ずる事でもあるが、反面金木の商店の方たちは、農業問題をもろに受けとめ、自分ごとのように心配している。近辺の農家が駄目になれば売上げ減が必至、店替え倒産がもう目に見えていると言ふ。農家思考は一つの嘉瀬一津軽だけでなく全国的なものと思うが、消極的な、「長いものには巻かれる」主義が、虐げられた当時のままに残っているようである。

明日あした食う米が無くても、お祭り騒ぎが好きだと言ふ指向から、その縁を探ぐつてゆけば、嘉瀬は芸能人一歌手が多く輩出されている。民謡の黒川桃太郎、鎌田稲一は別格として、歌謡(流行歌)歌手として、既にレコードを出した歌手としては、平川幸夫(亡平川由八さんの息子)五所川原あき(鳴海繁さんの娘)浜木じゅん(原田源太郎さんの息子)三田圭二(亡長利育造さんの息子)最後にはドオオンと、吉幾三は皆さん御存じの通り、五人とも誰はばからない生粋の嘉瀬子である。

文化面からは、敗戦直前疎開中の太宰治に師事したのは嘉瀬の人ばかり。明治、大正、昭和と続けてきた俳句人の人脈。いち早く郷土歴史を掘り起こし、今「かたりべ」第七集目を発刊しようとしている、嘉瀬ふるさとを探ぐる会の面々。

よつて嘉瀬の貌は保守色も進歩色も含めて多面的である。その中から素晴らしい可能性の花が咲くはず。